

2020/12/13

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑳

『イエス様のもとへ帰ろう』ヨハネ 9:1-23

■相手に条件をつけるという問題

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」」（ヨハネ 9:1-2）

弟子たちは盲人を見て、「この人の目が見えないのは、誰が犯した罪のせいか」とイエス様に尋ねました。ここでのいちばん問題は、困難な状況を即座に罪の罰だと思ふ、弟子たちの発想です。

人間には、物事を関連付けて統一しようとする思考パターンがあります。その結果、弟子たちは、災いを罪と罰を結びつけて考えました。

なぜ私たちは関連付けをするのでしょうか。

私たちのいのち（魂）は、神から貸し出されたものです。神は「三位一体」という、完全に一つに統一された方です。父なる神、イエス・キリスト、聖霊という神様が、互いに受け入れ合い、結びつき、一つに統一する運動をしておられます。だから、私たちの目から見るとおひとりにはしか見えません。それが三位一体です。そして、このよう関わりを、聖書は愛（アガペー）と呼んでいるのです。愛（アガペー）とは、相手を無条件で受け入れ、一つとなる関わりのことです。この神のいのちが、私たちの中で愛を展開しています。それが、物事を統一しよう、一つに結びつけようという運動になっているのです。その結果、私たちは自然界の中に関連性を見つけては、グループを作り、法則を見つけようとします。このようにして、数学や科学は発展してきました。

しかし、問題は、この世界の出来事と神がなさることを結び付けようとすることです。この世界の動きは、すべて原因と結果が関連づいています。関連付けるとは、条件を見つけるということでもあります。それを、神に対してもしてしまうことが問題なのです。なぜなら、「神はこういう方だ」と私たちが条件をつけると、その条件に合わない時、「神がいるならなぜこのようなことが起きるのか」「なぜ祈っても答えられないのか」と文句を言うようになるからです。私たちは人に対しても、「こうあるべきだ」「○○しなければいけない」と条件をつけることで、そうでない人に不満を抱き、文句を言ったりします。

神は確かに私たちを統一しようとなさいます。けれど、それは条件をつけずに受け入れるものです。

■神は条件をつけない

「イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現われるためです。わたしたちは、わたしを遣わした方のわざを、昼の間に行なわなければなりません。だれも働くことのできない夜が来ます。わたしが世にいる間、わたしは世の光です。」」（ヨハネ 9:3-5）

イエス様はここで人がする関連付けを拒否なさいました。神は一切の条件をつけません。条件をつけない方が神です。

確かに人間には条件がつきまといます。あなたが存在するということは、あなたの親がいるという条件がなければなりません。食べるということには、おなかがすくという条件が必要です。しかし、神に条件をつけてはいけません。

神様はあなたの価値に何の条件もつけません。がんばったら何かをあげよう、などという条件もつけません。神の目からするとあなたの価値は不動であり、何物にも左右されません。これが条件をつけないということです。だから、姦淫の現場で捕まった女性のこともさばかなかったです。私たちは、「〇〇ができたならほめてあげる」というように、自分の価値にも人の価値にも条件をつけますが、神はいつさいの条件をつけませんから、たとえあなたの行いが罪であっても、「私の目にはあなたは高価で尊い」という見方を変えないのです。その証が十字架です。神は罪人のために十字架に架かり、ご自身の愛を明らかにされたと、聖書は語っています。

神が私たちに条件をつけないのですから、私たちも神に対して、神ならばああすべきだ、こうすべきだと条件をつけてはなりません。条件をつけるとつまずきます。また、これは人間関係においても同じです。人に条件をつけるからつまずくことになるのです。この条件のことを律法と言います。ですから、律法主義には問題があるわけです。「無条件で受け入れること」、これが、神が私たちの中で展開している運動です。神はいつさいの条件をつけず、苦しんでいる者をとにかく助けられるのです。

なお、ここで「昼の間」と語られているのは、「イエス様がこの地上にいる間」という意味です。

■盲人をいやす

「イエスは、こう言ってから、地面につばきをして、そのつばきで泥を作られた。そしてその泥を盲人の目に塗って言われた。「行って、シロアム（訳して言えば、遣わされた者）の池で洗いなさい。」そこで、彼は行って、洗った。すると、見えるようになって、帰って行った。」（ヨハネ 9:6-7）

イエス様は多くの病人をいやされましたが、この場合だけ、いつもとパターンが異なります。多くの場合、イエス様は、御手をふれるか、お言葉によっていやされるのですが、今回

は泥を作って目に塗り、洗い流すという方法をとられました。これは一般的に、自然界には病気をいやす薬があることを象徴していると言われていています。神様は医学を否定しないということです。神様は、奇跡によっていやすことも、薬によっていやすこともなさいます。しかし、神様が本当に目指しているいやしは、からだのいやしではなく、心のいやしです。どんなに体の病気が治っても、肉のいのちには限界があります。一番大切なことは、私たちの心がしっかりと神に向き合って苦しみから解放され、安息を手にするということです。このことを忘れてはなりません。神様は私たちを本当の意味でいやしたいと願っておられます。つまり、罪の奴隷から解放して、死という病から解放し、私たちを生きるものとし、私たちを完全に自由にするということです。神様のなされることは、すべて、この完全ないやしに向けられています。

さて、盲人の目に泥を塗ったイエス様は、その泥を池で洗うように彼に言いました。イエス様が洗い流してあげてもよかったように思いますが、神様は、人にできることは人にさせることによって、その人の信仰を育てるのです。

私たちは時折、祈っても神の答えがないように思うことがあります。それは、神様が「あなたにできることだから探みなさい」と、待っておられるのです。神様は、「探みなさい、そうすれば見つかります。」と言って、あなたを導いておられます。ですから、自分にできることを放棄してつぶやいてはなりません。神様は、あなたを導き、必ず助けてくださいます。しかし、あなたの命令をきく魔法使いではありません。

■自分が信じたいようにしか信じないという問題

「近所の人たちや、前に彼がこじきをしていたのを見ていた人たちが言った。「これはすわって物ごいをしていた人ではないか。」ほかの人は、「これはその人だ。」と言い、またほかの人は、「そうではない。ただその人に似ているだけだ。」と言った。当人は、「私がその人です。」と言った。

そこで、彼らは言った。「それでは、あなたの目はどのようにしてあいたのですか。」彼は答えた。「イエスという方が、泥を作って、私の目に塗り、『シロアムの池に行き行って洗いなさい。』と私に言われました。それで、行って洗うと、見えるようになりました。」また彼らは彼に言った。「その人はどこにいますか。」彼は「私は知りません。」と言った。彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。」(ヨハネ 9:8-13)

彼がいやされたのを見て、人々が集まってきましたが、そんなことはありえないと疑う人が大勢いました。人は、自然界の法則に反したことをなかなか信じられないものです。彼らは、目の前で起こった神の奇跡を信じることはできませんでした。

彼の証言を信じられない人々は、彼をパリサイ人のところに連れて行きました。当時、パリサイ人は、問題が起こると裁判のようなことをしてくれる存在でしたから、そこで、嘘か本当か、真実を明らかにしようとしたのです。

「ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。」すると、パリサイ人の中のある人々が、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」と言った。しかし、ほかの者は言った。「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。」そして、彼らの間に、分裂が起こった。」(ヨハネ 9:14-16)

パリサイ人が、イエス様を神から出たものではないと決めた理由は、その日が安息日だったからです。安息日は、仕事をしてはいけない日でしたから、神であれば、安息日を守るはずだと考えたのです。彼らにとって、これは医者の行為であり、労働でした。それに対してイエス様は、「目の前で困っている人がいたら助けるものだ。あなたたちは、安息日の意味を履き違えている」と指摘なさっている場面があります。

パリサイ人たちの考え方は、形式を重んじ、相手に条件をつける考え方です。「神とはこうあるべきだ」という自分たちが決めた条件に当てはまらなかったので、イエス様は神から出た者ではないと結論付けたのです。私たちの考え方はいつもそうです。自分で決めた条件に当てはまるか当てはまらないかで、物事の良し悪しを判断します。ここに問題があるのです。形式や建前を重んじる人たちと、物事を本質でとらえようとする人たちは、いつの時代も対立します。人をいやすという、人にはできないことができる方は、神から出たとしか言いようがないという事実は、ここでは置き去りにされています。

「そこで彼らはもう一度、盲人に言った。「あの方が目をあけてくれたことで、あの人を何だと思っているのか。」彼は言った。「あの方は預言者です。」しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということを信ぜず、ついにその両親を呼び出して、尋ねて言った。「この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。」

そこで両親は答えた。「私たちは、これが私たちの息子で、生まれつき盲目だったことを知っています。しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。」

彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。そのために彼の両親は、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。」(ヨハネ 9:17-23)

目が見えるようになった青年は、素直にイエス様を受け入れました。しかし、パリサイ人

たちは、ついに彼の両親まで呼び出して、彼が本当に息子かどうか、本当に目が見えなかったのかを確かめています。この行動は、人は自分が信じたいようにしか信じないことを表しています。誰が何と言おうとも、神から出た者がそんなことをするはずがないと、自分のほしい答えを得るまであきらめないのです。

これは、人は、人の言葉を自分の聞きたいようにしか聞かないということでもあります。同時に先生に怒られた生徒が、一人は「先生は自分を励ましてくれた」と受け取り、一人は「やっぱり自分はダメなんだ」と受け取ることがあります。これは、先生の言葉に問題があったのではなく、それぞれ自分が聞きたいように受け取るためです。

私たちは、どんなことを言われても、自分が聞きたいように聞き、自分の中で決めてあった答えに結びつけようとしています。常に自分の中の物差しで物事を測り、人を責めたり、文句を言ったりしています。そもそもパリサイ人たちは、イエス様を信じる人を追放することに決めていました。そのため、両親は彼らの質問に答えることから逃げたのです。

■宿営の外に出よ

多く人は、最初から自分の中で答えを決め、自分の答えに合わないことを見つけ出しては腹を立てることを、繰り返しています。このことをカウンセリングでは「人生脚本」と言ったりしますが、なぜ人はそのような習慣を持っているのでしょうか。それは自分で自分を守るための手段だからです。私たちは自分の殻に閉じこもり、誰も自分の中に寄せ付けなことで、自分の安全を守ろうとしています。パリサイ人たちは、他の人の意見に耳を貸さないことで自分の立場を守ろうとし、盲人だった人の両親はパリサイ人を恐れて逃げることで自分を守ろうとしました。しかし、まわりを恐れて自分の安全のために生きることは、結局は自分自身を苦しめます。

私たちが、人と自分を区別し、その安全地帯をこじ開けて入ろうとするものがあると、怒りを爆発させて、来るなと阻止するのは、恐れによるものです。これを聖書は死の恐怖（罪）の奴隷と言っています。私たちは、自分が作り上げた世界がいちばん安全だと思っているので、なかなかそこから出ようとしません。しかし、自分で見張り、自分で安全を確保しなければならず、いつも人の言葉を気にして生きるその世界は、決して安全ではありません。だから、イエス様はこの地上に来て、「そこを出てわたしのところに来なさい、私のところのほうが安全だから。」と語られたのです。

「ですから、私たちは、キリストのはずかしめを身に負って、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。」（ヘブル 13:13）

神様はあなたに「自分の殻から出て、私のところに帰ってきなさい。ここにこそあなたの安息がある。」と語っておられます。これがヘブル書のテーマです。

自分の殻に閉じこもるのはやめて、宿営の外に出て主のみもとに行きましょう。あなたが安全だと思って築いてきた都は、永遠でも自由でもありません。偽の都です。

賛美の目的は、あなたが安全だと思い込んでいる宿営の外に出ていくことです。自分を飛び出し、神に近づく手段の一つが賛美なのです。自分の殻を出て、神のみもとに行く者の保障を聖書は次のように教えています。

「金銭を愛する生活をしてはいけません。いま持っているもので満足しなさい。主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」」（ヘブル 13:5-6）

金銭とは、自分の安全を確保しようとするものの象徴です。私たちは、様々な鎧を身につけ、自分を責めるものから自分の身を守ろうとしています。しかし、神様は「私があなたを助けるし、あなたを守る。私はあなたを絶対に捨てない。だから、私のところに帰りなさい。」と呼びかけておられるのです。この呼びかけをするために、イエス・キリストはこの地上に来られました。ここにクリスマスの意味があります。

クリスマスは、神様からのプレゼントを受け取る時です。そのプレゼントとは、あなたが今暮らしている偽の都からあなたを追い出し、本当の住まいに連れて行くことです。自由のない自分の殻から飛び出し、神のもとに帰ってくるようにと、神様は繰り返し語り続けておられます。